

♪ゲズブール「アコーディオン」その2(承前)♪

アコーディオンは大道芸の物乞いの傷痍軍人の楽器であまりイメージがよろしくないという嘆き節は昨今では聞かれなくなりましたが、実はフランスにもそういう感じはあります。ゲズブールという人は固定観念を最大限に利用しつつ固定観念を打ち壊す達人なので、この曲の基本は物乞いのイメージでできていて、作者のゲズブール自身(画像手前横顔)がシャンソン歌手のフィリップ・クレイ(画像の奥の長身の男)とデュエットした動画(インターネット上にフランス国立視聴覚研究所が公開しているアーカイブにありました)でも襤褸をまとって髭面で歌っています。切り取った画像には入れませんでした。足元にはご丁寧に犬まで連れていきます。

この曲はもともとゲズブールが1962年にジュリエット・グレコに書いた曲で、21世紀になって

もグレコの重要なレパートリーであり続けています。パリの下町の庶民のイメージを裏切らないこの曲は、外国に於けるフランスのイメージそのものなのだと言っています。それが単なる紋切り型に終わらないのがゲズブールの面目躍如たるところなのですが、一般にはお洒落なアコーディオンの響きとパリ下町人生の悲哀を感じる曲なのです。(以下1番歌詞引用)



Dieu que la vie est cruelle (デュークラヴィエクリュエル)	神様、なんて人生は残酷なのでしょう
Au musicien des ruelles (オミュジシャンデリュエル)	路地裏の音楽家には
Son copain son compagnon (ソソコパンソソコンパニオン)	音楽家の友、音楽家の道連れ
C'est l'accordéon (セラコルデオソ)	それはアコーディオンです
Qui c'est-y qui l'aide à vivre (キセティキレダヴィヴル)	路地裏で音楽家が生きる助けになるのは何でしょう
A s'asseoir quand il s'enivre (アサソワールカンティルセニール)	酔いどれてしゃがみこむ助けになるものは
C'est-y vous, c'est moi, mais non (セティヴー、セモワ、メノン)	それは皆様でしょうか、自らでしょうか、そんなはずはありません
C'est l'accordéon (セラコルデオソ)	それはアコーディオンです
Accordez accordez accordez donc (アコルデアコルデアコルデソ)	さぁお恵み下さい
L'aumône à l'accordéon l'accordéon. (ロモヌアラコルデアコルデオソ)	施しは認められていますアコーディオン (引用ここまで)

作詞の約束とテクニック

日本語の詩歌や歌詞に七五調が多いのは調子が良いからですが、フランス語でも詩を書いたり作詞をする場合には様々な決まりと技があります。リズムが重視され音の数に関する法則もありますが、多くの場合に行の終わりを同じ音にする、いわゆる韻を踏むことが行われ、詩や歌詞と散文の一番わかりやすい違いになっています。

上記の1番の歌詞でも最初から「クリュエル/リュエル」「コンパニオン/アコルデオソ」「ヴィヴル/セニール」「メノン/セラコルデオソ」と行末が2行ずつ同じ音で揃えられています。ルフランの各行も最後に「アコルデソ/アコルデオソ」と同じ音が響きます。

さらに「アコルデ」は「音楽の調和」と「お恵み下さい」

の2種の意味がある言葉なので、表面上は「お恵みを」と受けながらも、楽器の歌ですからハーモニーの意味も残ります。ルフランの「ドン」は「さあ、では」というかけ声でもあり、音だけ聞けば「贈り物」でもあります。ルフランでは同じような単語を繰り返しながら重層的にイメージを展開しています。

そして、フランス語をカタカナでもお読み頂ければ、やけにカ行とサ行が多いことにもお気づき頂けると思います。似たような音を含む語を並べるのはアリテラシオン(畳韻法)であり詩法のひとつです。豊富な語彙と、それを使いこなす機知を要するので、言葉のアクロバットであり、これもゲズブールの得意技のひとつです。(以下次号)